

# 浄土

1984-7

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和二十四年四月二十八日 運轉省 (特別授承認雜誌) 第三二五号  
昭和五十九年六月二十五日印刷 昭和五十九年七月一日発行

第五十卷

七月号



小林



父母とともしみじみとする盆用意

暑い夏の盛りとはいえ、おぼんを迎える頃になると、なぜか心が落ち着いて、ゆとりのある生活ができるような気持がするもの、ひとえに今は亡きご先祖の精霊と、ともに過ごすことができるという心の安堵感からか。毎年、おぼん時分になると、母がいそいそと盆棚の飾りつけを行ない、楚々として盆支度をするのが、なんとも楽しい風情である。

時に、父や私も、母のお手伝いをして、魂祭の準備をする。仏壇を掃除し、仏具のお磨きにも余念がない。祖母が使っていた古い小机に真孤篋を丁寧<sup>まこもしろ</sup>に敷き、ナスやキュウリに苧殻の手足をつけた牛や馬を飾り並べる。季節の果物や野菜、祖母などがとくに好んだ甘味の粗菓なども供えられて、盆棚もにぎやかである。芋の葉の上に盛りつけら

れたそうめんが、いかにも涼しげでおいしそうである。今は亡き祖父や祖母の面影が、位牌に映ったローソクのお明かりの中にふと思い出されて、父や母や私の居心地もよい。走馬灯に運ばれて、あたかも仏の世界に安座しているような想いでもある。

盆灯籠過ぎし懐かし偲び草

仏さまのありし日のことども、私自身がまだ幼なかつた遠い日々の想い出が、はるかに懐かしく偲び起こされることである。

盆支度して古町のひそとあり 及川 貞

夕方、打ち水をしておいした縁先から、ほんのりとした涼風が漂ってくる。軒下の風鈴がかすかに音を立てたようだ。

(勝崎裕彦)

# 七月号



是のゆえに無量寿仏をば、無量光仏、  
無辺光仏、無礙光仏、無対光仏、焰  
玉光仏、清浄光仏、歓喜光仏、智慧  
光仏、不断光仏、難思光仏、無称光  
仏、超日月光仏と号したてまつる。

——『無量寿経』光明歎徳章

## 目次

### 法話

- 施餓鬼会に想うこと……………北 邨 謙 順……(2)  
 妙好の華……………橋 爪 勇 哲……(7)  
 今年もお盆を迎える……………小 西 祐 謙……(12)

### 《世相評談》

- 悪魔のささやき……………大 室 了 皓……(17)

### 特別寄稿

- 仏説孟蘭盆経と目連変文……………静 永 賢 道……(22)

### 心のはなし(上)

- 人間万事塞翁が馬……………曾 田 文 雄 ……(30)

### ◇◇長篇連載小説◇◇

- 立ち止まるな善導 第1回 ……………寺 内 大 吉……(35)  
 前章・絶唱の経典 (一) ……………挿絵 松濤 達文

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

＜表紙裏＞一月一句「父母とともしみじみとする盆用意」

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

## 施餓鬼会に想うこと



新緑の五月に入ってから奇妙な事件が続いた。犬や猫が毒入りのカステラやソーセージを食べて、踊り狂って死にました。それが、東京・静岡・埼玉・その他で続発しました。一人の人物が、あちこちでやったとも思われぬし、ゲバ学生の共謀にしては、相手が動物だし、何か腑におちない思いで過していたら、毎日新聞の社説(59・5・27)が、「仕返し」であるという説を掲げました。オートバイ首

北<sup>きた</sup> 邨<sup>むら</sup> 謙<sup>けん</sup> 順<sup>じゅん</sup>

(大本山光明寺執事長)

つり死亡事件も、一連のものであると見ている。東京のある公園で、オートバイの高校生が深夜に道路に張られたロープに首をひっかけて死亡した事件である。

「仕返し」説の裏付けはこうである。ペットを飼う家庭が多くなると、そのフンの捨て置きなどをめぐってトラブルが増えているという。それらの被害者が加害者になったというのである。フン害に「フンガイ」したこと

による。洒落にもならない暗いでき事である。ロープ事件も、同様な事情がうかがわれる。オートバイの深夜騒音の被害を受けている付近の住民の怒りが当然考えられる。被害者が即ち加害者になる。グリコの毒入り情報から連鎖反応を起したと指摘して、陰險な「仕返し」社会になりつつあるを思うと暗然とせざるをえない、とのべている。

陰險な報復、と聞けば、仏教に云う餓鬼道が想起されてくる。ここで往生要集を念のために開いて見ると、「往処に二あり」と冒頭に出てくる。一ヶ処とばかり思っていたが、二ヶ処でした。「一は閻魔王界なり。二には人天の間に在り」と。一には閻魔王界にあるとは、これは地獄である。すると地獄と餓鬼とは同じ領域内にあることになる。つまりある者は地獄相を示し、ある者は餓鬼相を見せることになる。表は別相を示現するが、元は同根にちがいない。それから二には人天の間に在りですから、現在唯今のこの世界の中に

餓鬼相を示すことになる。

さて、その結びに云く、「慳貪と嫉妬の者餓鬼道に墮つ」と。その党内嫉妬・慳貪と施餓鬼会の表白文に出るそのいわれは、ここにある。嫉妬とは、ねたみそねみですが、その底に憤懣心・瞋恚心の火がメラメラと燃えている。報復心も同一線上に直結する。

無量寿経の下巻の文がここで想起されてくる。「然るに毒を含み怒りを蓄え、憤りを精神に結んで、自然に尅識して、相い離るることを得ず。皆まさに対生して更に相い報復す」とあります。然含毒畜怒結憤精神……更相報復と読んで参りますと、仏語が身に沁みてまいりまして、この世の実相を見る思いで、砂をかむような、なさけない思いがいたします。法句経に、釈尊の有名なお言葉があります。「怨みは怨みを以ては終に休息することを得べからず。忍を行じてのみ、怨みを息むることを得。此れを如来の法と名く」であります。終に」といふのは、いつまでたつてもとい

うことでしょう。業道は輪廻して休息することがないからであります。無量寿経の、「皆まさに対生して、更に報復しあうのだ」というのもこの点の指摘であります。

梵網経を拝見しました。仏子たる者は「瞋を以て瞋に報じ、打を以て打に報ずることを得ざれ」と告げられます。法句経の説示を更に具体化されたもので、「打」という一字は手を挙げて打つ姿が彷彿できます。フン害も騒音公害も悪口雑言も輕蔑や報復も、一切の行動をふくんで「打」と思うべきであります。

私共はとかく怨みには怨みを以てする報復行動を是認したがる。そうしないと、面子が立たない・男がすたる・気がすまない、という。それなら、如上の仏の教説は空説虚言です。私共が沈思するところはここに在ります。曇鸞大師は「業道秤の如し。重きもの先ずひく」と示される通り、業報因果の流転して尽きざる相に眼を開かぬからであります。

無量寿経には「教語開導すれども、これを

信ずるものは少なし。是を以て生死流転して休止あることなし」と示されるのも、ここにあります。眼の開かれない閉された姿を「愚痴」といいます。愚痴・無明の業界が描く世界が、地獄・餓鬼・畜生の三惡道です。

三塗の川は私共のよく知るところですが、皆人の貪瞋愚痴の惡水は

三塗の川の流れとぞなる

の古歌の通り、この川の正体は貪・瞋・痴の三毒ですから毒入りの川で、誰が毒を入れたかという、皆人間が自分自身で造って自分を入れた川です。それが流れこんだところが三惡道であります。

ところでこの川の傍に、老婆と老爺がいることになっています。婆さんを奪衣婆。爺さんは懸衣翁と呼ぶ。娑婆から来たものの着ているものを奪い取って裸にする役が、この奪衣婆。その着物を樹の枝に懸ける仕事をするのが懸衣翁です。ここの嫌われ役の主役が婆さんというのも面白い。けれども、この婆さ

んにはどんな人でもかなわない。巨億の富豪でも、大國の宰相でも誰でも全部はぎとられて、一人のこらず素裸であの世へ往くのです。

着装品は一切ここまです。財宝も名譽も肩書も権力もここまです。あとは裸ですから、ついてゆくのはその中味になります。いかに大病院の経営者でも哀れな精神病者を畜生あつかいしたら、その肩書ははぎとられて、行った所業がついていく。その行業を三業という。三業とは、身に行った業と口の業と意業です。もとより意業が根本です。人が知らぬからといって平然としているのは人間の浅ましさです。

これが愚痴の姿です。仏教では「業道自然<sup>じんねん</sup>」といいます。

法然上人のご法語に曰く、「ついに閻魔の片に到りぬれば、罪の浅深をさだめ業の輕重をかんがえられる。法王罪人に問いて曰く、汝、仏法流布<sup>ぶつぽふ</sup>の世に生れて何ぞ修行せずして、いたずらに帰り来るや」と。

「帰り来るや」——何もしないで、何故帰ってきたのだ！という。帰るといふ語がよく流転三界の相を示している。なぜまた堕ちてきたのか？といわないで、なぜまた帰ってきたのだという閻魔様の言葉には涙があります。

仏法流布の世に会いながら何してたんだ！という涙の叱責です。鬼の涙といいますが、エノマの涙です。

たまたま犬猫事件の話から始めて、ついに地獄まで参りましたが、梵網經には「六道の衆生は皆これ我が父母なり」とあります。いかなる罪業の人たりとも、いかなる畜類といえども、我が父母に結ばれる同類観が仏教の衆生觀です。ほろほろと鳴く山鳥の声きけば父かとぞ思う母かとぞ思う、というのが日本人の心情だったのです。それでこそ、弥陀の本願が発動する基底が肯けるのです。更にまた、施餓鬼をせずにはおれない心情の根基があるのです。

仏徳に四智があります。大円鏡智・平等性<sup>じやうじやう</sup>

智・妙觀察智・成所作智じょうしよしちです。大円鏡智は仏果を成就された仏の根本智で、清淨無垢・真実無為の当体で、大いなる円満した鏡の如き智慧ですが、鏡が曇りなく一切をそのままに映すように、三界六道が映現ようげんする鏡でもあります。仏は一切智者です。一切衆生の善惡兩業そのままにご存知である所の智慧です。

偏執なく平等のお心なるによって平等性智となり、然もそれが平等の慈悲に転ずる根源でもあります。宗祖様が「平等の慈悲に催されて」と申される本願の興起する根源でもあります。大円と平等の二智に依止して現われる世界は妙觀察智の世界であります。罪惡の衆生が攝取して捨てたまわぬ衆生として観て下さるのはこの妙觀察智であります。そこで仏は衆生済度の具体的な善巧を思案なされる。これが成所作智であります。仏智に基く大悲心の顯現であります。浄土の功德莊嚴・二十九種十八円淨の妙境と現するのであります。宗祖様は、念仏が仏の万徳所歸の名号なる

を以て最勝のいわれを示されました。選択集に「名号は万徳の歸する所なり。然れば則ち弥陀一仏に有する所の四智三身：等の一切の内証の功德と、相好・光明：等の一切の外用の功德と皆悉く弥陀仏の名号の中に摂在しよくざいせり云々」とあります。因みに聖阿上人は直牒に「故に是れを唱うれば因以の諸行の功德、我等が識心に薰成くんじやうして無辺の功德を得る也」と説明を加えました。識心薰成得無辺功德——これは表層の意識のみでなく深層の意識に薰習するから、不知不識の中に無辺の功德を頂いているのであります。

そうであるならば私共は念仏の功德によって三垢消滅・身意柔軟の徳相を頂いて、自行に励むと共に社会の向上に身を挺することが大切な事柄になって参ります。

そしてこの最勝功德の名号が現当二世の妙果を現じて下さることを喜び信受して、三界の万靈ならびに有縁の靈位のために、施餓鬼のご回向を心から申し上げたいと存じます。

(法)

(話)

## 妙好の華

梅雨もあがり、陽ざしは青葉の裏まで透りそうである。それでも人里離れた此の山寺は緑に覆われ、樹間を渡る風は軒に掛った鈴を鳴らして如何にも涼やかである――。

### 常称庵

その鳴る音の下手に、雨露を重ねた自然木の板額が懸っている。それには円ろやかな文字で「常称庵」とある。これは、昭和の初期、或る念仏者の寓居を



橋爪勇哲

(福岡県篠栗町西林寺住職)

寺の裏山に移し、ひろく信者の籠り堂として利用されたその堂に掲った板題である。

### クメ女の生立ち

この籠り堂の主が荒巻クメ女である。徳川末期、ペリー提督の率いる黒船が浦賀に入港した其の翌年――嘉永6年の春、クメ女は筑前博多の新宮浜で呱呱の声を上げた。五人の弟と共に娘時代を過し、やがて結婚をして若い夢を追うたのであるが、夫の狼藉

によってその袂を分ち郷家に戻ることとなった。クメ女自身の心暗さも、さることながら親の心労は殊の外深かった。それが因で母は間もなく他界、翌年、父も亦その跡を追うた。杖とも柱とも頼む両親に先立たれたクメ女の日々は全く重苦しい悩みの明け暮れであった。

### 再縁のはこび

それから二年程して、クメ女30歳の時にボツカリ縁談が持ち上った。相手は同郡内篠栗の桶職の荒巻貞次さんで、独身ではあるが、十九歳も年上の人であった。初婚で受けた男性への不信任は此の話も気の重いものであった。しかし、多勢の家族を抱えて家を守る長弟のことを思うと、これ以上、心配をかけてはならないと、意を定めて再縁に踏切った。両親を亡くして未だ浅い、其の追慕の憶いはどうしようもなく、新婚早々の主人に「月に一日だけ自由なお暇を下さい……」と申出た程である。許された日は、白い着物で一日中のお念仏を申したことであった。

### かかる雲

二人に和やかな日が続いたが、この家庭に気懸りなことが一つあった。それは二人の間に子宝が恵まれなかったことである。今日とは違い、家を継ぐ者が無いと云うことは大変な事であった。遂に二人は養子を迎えることにしたのであるが、これもそんなに長くは続かなかった。この悩み事が実は、クメ女の歩みを大きく更えることとなったのである。家庭の憂き煩いを解くには、どうしても寺に詣って心を修めなければと思い、念仏同行の仲間入りをしたのである。

### 五重の出会い

明治25年（一八九二）クメ女は40歳の時に初めて檀那寺で五重相伝を受けたのである。その後、幾度か席を重ねて明治40年（一九〇七）春には、時の高德、山下現有大僧正の五重勸誡をうけ、五十の坂を越えたクメ女には益々、ほとけへの憶いの心が募っていたのである。

一点の疑い晴れて南無阿弥陀

愚鈍念仏申すばかりぞ

とはその頃の詠である。

### 念仏の徳は伝わる

お念仏の育てを受けたクメ女は何時の間にか、不信心の主人をも導く程になっていた。ある日、突然「俺は今から念仏するッ」と言い放ち、続け様に数時間も木魚を打ったと云うことである。そして最後、明治45年（一九一三）八月には助音念仏の同行に見護られた79歳の主人を、心行くばかりに浄土の道ゆきをさせ終えたのである。

### 大念仏者に遇う

クメ女60歳で主人を失い、職を継ぐ人もなく、家屋敷を人に譲り、自らは小さな家の一人暮らしであった。大正2年（一九一三）の晩春、クメ女は偶々、檀那寺で大念仏者の山崎弁栄上人に値い、至心随喜、心機一転してその後は勇猛に念仏を申し始めているのである。その胸の内を歌に託している。

ただ今は生れかわりし心地して

六字称えて気楽なりけり

大正5年（一九一四）にも岩井智海大僧正の五重相伝を受け、「今までの五重の巻物手に貰いこの度心に貰う嬉しさ」と詠んでいる。

その当時、豊前芝原の善光寺（宇佐市四日市町）では各地でその本尊善光寺如来の出開帳が催されていた。これに絡らむクメ女の心情を吐露した仮名書きの遺文は真に素晴らしいものである。その中に、

——少しの雲も晴れにけり。いよく心十五夜の有明月となりけり。ただただ呼びてナムアミダ仏。狭くとも畳一枚仏間にて、衣食もせず臥せもせず、念仏以外はもの言わず、我身一人の規則なり。この仏間、われが為には千畳敷、おもいをなして申す嬉しさ。——称うれば死して後は極楽の、花ふる浄土の真中に、生れて菩薩の仲間入り。

### 一千日朝詣りと心の開け

大正6年（一九一七）クメ女は町内の珠林寺で再

度、山崎弁榮上人の教えを享け、遂にその秋、珠林寺ご本尊への一千日朝詣りを決意した。雨の日も、風の日も、実にそれから四年半、殆んど休むことなく、千五百日間の曉詣りを成し遂げたのである。

その後も、間を見ては近くの山辺や洞穴に身を禅め、一心に念仏開悟を祈っていたものである。大正10年(一九二二)弁榮上人の中陰が済んだ正月、69歳のクメ女は決然として岩杉山(六七九米)参籠を試みたのである。山頂洞穴に一・七日の念仏三昧、凍てつく寒風に身を晒らし、時に聞く狼の唸り声にも怯まず、不惜生命のお念仏を申し続けたのである。果せるかな、満願七日目の明け方、靈光感得して心に妙境を得たのである。その時、クメ女の口から、思わず漏れたものは、

月影の至らぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞすむ

の法然上人の御道詠であつた。

### 仏さま憶いの侘び住い

クメ女の一人暮らしは四畳半・二畳の侘び住居。近

所隣りの縫物を僅の時間賃で奉仕するのとお念仏が日課のようであつた。食事は遍路さんの供える日晒らしのお洗米であつた。お菜(おかず)は野菜の残り物、皮に至るまでドブ漬けにして食べている。クメ女はどうやら「衣食は生命を支うるのみ」の論しが身に着いていたようである。けれど人様に対してはキチンと立派なお米やお菜を差出していた。

殊に仏様への給仕ぶりは驚く程である。ご飯は別釜、お鍋も別で、つましい暮らしの中に二組の炊事用具が揃えてあつた。仏前供養もなみなみではない。物が無い時は梅干一個を仏器に盛って手を合せていたと云う。

### お念仏婆阿さん

朝の六ツ雀チイチイちゅう(鼠)は鳴る

念仏の声に木魚の音

鶯のホウホケキョと囀るを

耳にふれつつ念仏称えん

極楽の花のようなる雪が降る

雪を眺めて申す日もあり

クメ女念仏の日々が躍如として浮び上って来る。  
人一倍にお念仏を申すクメ女であるが「人よりも分  
けて煩惱深けれど隣り近所は菩薩ばかりで」と仏の  
お慈悲を身一杯享けていた。誰れ云うとなく周りの  
人達はクメ女を「お念仏婆阿さん、お念仏婆阿さん」  
と呼ぶようになった。

その心の温かさは人に対してだけではない。

雀来いナムアミダブの飯やるぞ

飯を頂き生れ更れよ

永らえて人に嫌われおろうより（雑草）

花に生れて仏の前に

転生成仏をも祈っていたのである。

大正14年（一九二五）二月十四日、家廻しの念仏会  
を終えてから身の不具合を感じ、それから床に就く  
こととなり、一時は中日和もあつたが、一進一退し  
てその夏七月十九日の午下り、世寿73歳をもってお  
浄土へみまかったのである。

### 愚鈍念仏

貧しかったクメ女には寺子屋もなかった。目に一

丁字ない文字通りの無学文盲であつたが、念仏の同  
行に仮名字を習い、歌を覚え始めたのである。その  
詠み歌は三百首にものぼっているが、方言まる出し  
で真に読み辛い。しかし、その内容は衣を纏うもの  
とても舌を巻く程である。まさに初心（うぶ）に信  
じ、至誠に念じた南無阿弥陀仏の総りである。晩年  
のクメ女は殊の外、一枚起請文を飲み、心より高声  
で拝読しながら、

もの知りになりて地獄へゆこうより

もとの阿呆で極楽へ行け

と喝破している。

### 移り香は今に

妙好人荒巻クメ女を中心としたお念仏の集りは親  
から子へ、子から孫へと今も猶、毎月の例会が続い  
ている。籠り堂板額の「常称庵」は、このお念仏婆  
阿さんである荒巻クメ女に贈られた法名（常称庵歎  
妙念法尼）の庵号である。

(法)

(話)

## 今年もお盆を迎える



ふるさと——それは、いくつになってもなつかしい。

七月十五日、関西では八月の十五日のお盆が近づくと、都会で働いている人々の多くが交通の混雑にもかかわらず遠く故郷へ帰ってゆく。

久し振りに親兄弟や旧い友人に会ってよも山話に時を忘れ、平素ご無沙汰の先祖のお墓にお参りをする。日常の雑事に追われ、とかく見失い勝ちな自分自身をとり戻したようなホッとした気分を味わう。お盆の行事を済ませ、故郷の自然を満喫して人々

は再び喧騒の都会へと帰ってゆく。  
今も昔も変わらないお盆の情景である。

小 こ 西 にし 祐 ゆう 謙 けん

(上宮高等学校副校長)

◇

◇

故郷へ帰った時に味わう一種の安心感のようなものは一体どこから来るのであろうか。

人々が訪ねるのは故郷の自然であり、そこに住む人である。しかし、それよりも私たちをひきつけるのは「心のふるさと」ではなかったらうか。

お盆は、ふるさとへ帰る行事なのである。



人には誰しも父母がありその父母にまた父母がある。父母あつての自分であり、遠い祖先から生命を受け継いで今日の自分がある。一度だって途切れてはいない。生命のルーツはどこまで遡るか想像もつかない。「限りなき生命」という言葉の意味も承知しているつもりである。

けれども、それは実感として感じとれていないというのが正直なところであらう。



お盆の行事は、盆用意、迎え火、精霊迎え、墓参、棚経、送り火、精霊送りなどと続く。

季節柄、夏の夜の暗さの中で焚く迎え火、灯籠、提灯などの灯りはまことに情緒的で、夏の夜の広い深い闇には過去からの永い時間と広がりを感じら

れ、私たちを幽玄の世界へ導いてくれる。



顔も知らない私たちの祖先。私につながる多くの人たちのことが莫然とながら感じとれてくる、そういう実感を私たちに呼び起こさせてくれるのはお盆であらう。

以前にはお盆によく「茄子の馬」や「瓜の牛」が供えられた。歳時記にも記されている。なすやきゅうりに芋殻の脚をつけて牛や馬の形にして精霊棚に供える。この牛や馬に乗って帰ってくる、また帰ってゆくとされている。おがらで短い脚を作って仏前にお供えした婦人の話を聞いたことがある。亡くした幼な子が乗りやすいようにという気持から自然に背丈の低い馬が出来たという。いかにもお盆らしい情景と今も心に残っている。



お盆の由来については諸説があり、ここで改めて紹介することは差控えたいが、わが国では古く推古天皇、齊明天皇の御代から修せられており宗教行事としては最も定着したものである。「孟蘭盆経」によると、釈尊の十代弟子の一人である目連尊者がその神通力によって亡き母が生前の悪業によって餓鬼道に落ちて「倒懸」（ウラボン・ウランバーナ、さかさにつるす）の苦しみにあえいでいることを知る。母を救う道を釈尊に懇請したところ「七月十五日、僧自恣（じ）の日に衆僧に供養すべし」と教えられた故事に由来するというのが最も一般的である。

七月十五日の僧自恣の日というのは、四、五月から七、八月に至る印度の雨期の間に教団の修行僧が一所に集って勉強修行する。これを安居（あんく）というが、その安居の最終日に全員が自分の行業を反省し、意識して犯してしまった罪、気付かぬ内に犯した罪のすべてを互いに問いただし反省懺悔して自らその身を清める、その日のことである。修行僧の最も新鮮清浄なこの日にそれらの僧に供養せよと釈尊は教えられる。「供養する」ということは、仏教では深い意

味を持っているが、僧自恣の日に僧に供養して、亡き母、更には七世にわたる父母の厄難を救えと教えられた釈尊のこころは、いずこにあったのであろうか。



私は、この説話の中で特に目連の母がその業障深きゆえに餓鬼道に堕ちて倒懸の苦しみにあえいでいたというところにショックを受ける。

目連の母は邪見貪慾で徹底した利己主義の人であったという。しかし、考えてみると程度の差こそあれ利己主義でないと言い切れる人はいない。果して私たちはこの母を責めることができるだろうか。

「父母恩重経」は、中国で作られた偽経であると言われるが、そこに説かれている内容は改めて読んでみる価値がある。

○ 人の此の世に生まるるは、宿業を因とし、父母を縁とせり。父にあらざれば生ぜず。母にあ

らざれば育せず。

○ 飢えたる時食をもとむるに母にあらざればく  
らわず。渴<sup>かわ</sup>く時飲<sup>のみ</sup>をもとむるに母にあらざれば  
咽<sup>のど</sup>まず。

○ 父母の恩重きこと天の極まりなきが如し。

と、子を産み育てる父母、特に母の労苦を詳しく  
述べ「父母の十恩」を挙げてゐる。その八番目に次  
のように説いている。

○ 若し夫れ子のためにせむを得ざることあらば  
自づから悪業を造りて悪趣に墮つることを甘ん  
ず。

「為造悪業の恩」という。子どもの身に何かあれ  
ば子どものためにはたとえそれが悪いことであつて  
も、地獄に墮ちるような罰を受けようともあえて  
行なつて悔いるところはないという親心。

教育ママとか過保護とか、とかく母に対する批判  
は多い。母である前にひとりの人として欲望のため  
に衝動のために罪をつくることもあるが、母の罪  
は多くの場合母ひとりで作すものではなくて、溺愛  
といわれようが、他人が何と批判しようが、なりふ

りかまわぬ子への一途な愛ゆえのものが多し。母か  
ら生まれぬ人はいないし、「父母恩重經」に説かれ  
ているような母の姿を思えば、目連尊者の母を責め  
ることはとても出来ないであらう。

罪深き母なればこそ、子にとって母は尊いのであ  
る。積尊が目連に諭されたころもその辺にあつた  
であらう。だからこそ母に対する報恩の意味をこめ  
て、「供養する」ことを教えられたにちがいない。

むかし「生身魂<sup>いきみたま</sup>」とか「生き盆」とかいって、お  
盆の前に父母などに贈り物をしたりご馳走したりす  
る行事があつた。亡くなった父母には盆の魂祭り、  
生きている両親にはその生き御魂<sup>みたま</sup>を祭ろうというの  
である。両親は最も身近な先祖、これも報恩の行で  
ある。

◇

◇

今年もお盆を迎える。年に一度ご先祖をわが家に  
お迎えして数日を共に過ごす。平素忘れていた父や  
母のことを想い、時には祖父母や亡き兄弟姉妹のこ

などを回想する。まことにゆかしい家の行事である。そして目に見えないきづなを考え、自分自身を見つめなおし、父母から更には、天地自然、万物に及び、やがては仏の無量寿、無量光に思いをいたす。得ることだけでなく、与えること、供養することの尊さを知る。お盆がそういう契機となればよいと思う。

折角ここまで定着したお盆の行事である。私たちの精神生活のために是非とも活かしてゆきたいものである。



幸せは 感謝の

あるところに ある

裏がえしていうと、感謝のないところには幸せはないということである。

どこに感謝があるか。どういう感謝があるか。

お盆を迎えるに当って考えてみることも大切であろう。

村上鉄瑞師著

菊五判 二八九頁  
定価 二、〇〇〇円

〒 三〇〇円

## 法然上人徒然草

所謂作家・学者の著作とは一味も二味も違ったわが法然上人像。一人の青年僧の限りない上人思慕の情念が生んだ労作。特に若き浄土教徒の必読をおすすめします。

自費出版のおすすめ

随筆・句集・歌集

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理されて、あなたご自身の本を作ってみませんか。小社ではなるべく小経費であなたの本が出来ますよう、ご協力させて頂きます。

東京都千代田区神田須田町二一三十一

有限会社 ルンビニ社

電話〇三―(二五三) 三五二〇  
三五二〇

《世相評談》

悪魔のささやき

生後五カ月の赤ちゃんを乳房で圧死させた母親が、四十九日の納骨を済ますと、遺書を残して姿を消した。

赤子を殺した悔恨の思いが綿々と綴られてあった。

それまで涙もみせず、弔問客と応対していただけに、夫の驚きはひととおりのものではなかった。



おおむろりようこう  
大室了皓

(大本山増上寺執事)

八方に手を尽したが、手がかりもなく途方にくれているところへ、当人から電話がかかってきた。

熱海にいる、という。上の四つと九つの子供のことが気がかりとなって死にきれなかったのかもしれない。

ようやくの思いで連れ戻した夫に伴われて訪ねてきた。

泣き崩れている。二人の子供はヤンチャ盛りの年なのに、異様な母親の姿に幼い心を痛めているのだろうか、じいっとうずくまっている。

彼女の泣き止むのを待って、私は話し始めた。

赤ちゃんは誠にお気の毒だけれども、それだけの寿命だったのです。「殺した」という罪の意識が当然ありでしょうが、さけられない事故だったのです。

諦めよ、といってもすぐには諦めることはできないでしょうが、諦めねばならないことです。幼い子を亡くす母親は決してあなただけではない。人類の歴史がはじまってから、数限りない親たちが、そういう悲運にあっているんです。そして、その悲しみに耐えて生きてきたんですよ。

また、ここに二人のお子さんがいます。不幸は赤ちゃんだけでたくさんだ。この子たちも不幸にしてはなりません。

この子たちにとって、あなたは三千世界にたった一人の、かけがえのない大事な大事な人なんですよ。

みなさい。あなたの乱れた姿に、この子たちは心を痛めていることがわからないのですか。この幼い年で、普通の子だったら騒ぎまわるだろうに、もう三十分以上も、うなだれておとなしくしているではありませんか。

自分だけが辛い目にあって、自分だけが悲しいんだと決めつけているようだが、この子たちだって、かわいい弟さんを亡くして悲しいんですよ。

私の家で、子犬が死にました。五つになる末っ子の姿が見えない。探しまわった末にやっと見つけました。本堂の裏で、夕日に向って、手ばなしで、大声をあげて泣いていました。

弟さんを亡くしたこの子たちだって、心の底で泣いている筈です、その悲しみは、誰が慰めてあげるんですか。あなたしかいません

よ。それなのに慰めてあげようもしない。自分だけが慰めてもらおうとしている。

あなたは自分の事しか頭にならないようだ。どうして、母親の務めを果そうとしないのですか。

「この子たちにとって、また御主人にとって、私はかけがえのない人なんだ」

という自覚をもってこそ、仏さまも助けて下さると思います。

仏さまに味方になっていただくか、それとも、仏さまにも見離されて地獄におちるか、それはあなた次第。今が一番大切な時ですよ。

懇々と話しているうちに、

「よくわかりました。頑張ってみます」

とようやく明るい笑顔をとり戻した。夫もその妻の姿に安堵して帰っていった。

ところが、一週間ほどしてまたやってきた。強く生きようと頑張っているが、どうしても心が乱れて、夜もろくろく眠れぬという。どうして、とたずねると、

昨年、新築した家の方角が悪い。引越した日が仏滅だった。

トイレの位置が悪い。鬼門に当たっている。庭に、つつじを植えたのが悪い。そこは太昔の墓のあとだ。

そういうことを弁えなかったために赤ちゃんが死んだんだ。早くなんとかしないと、また不幸がおきる。

というようなことを、知人らにいわれて、どうしたらよいか思い悩み、不安感にさいなまれて、家事も手につかない。もう私は駄目です。なきながら、苦しそうに訴えるのであった。

方角、仏滅、鬼門などといわれて惑わされているようだが、これらはいづれも、悪魔のささやきである、といって論じてあげた。

そもそも經典には十方の世界（東・西・南・北・上・下・東北・東南・西北・西南の十の世界）

には、それぞれガンス河の砂の数ほどの無数の仏がおられるとある。

どの方向にいても、仏様にぶつかる。仏様が待っておられる。

どこへ行っても、仏様が迎えて下さる。ということだから、悪い方角などあろう筈がない。

トイレが鬼門にあると、おどかされたようだが、鬼門とは鬼の出入する門である。その門を通過して鬼が家の中に入ってきて不幸をまき起こすというのだから、仏様を拝む心の篤い家には、仏様が住んで下さる。その仏様がおられる家へどうして鬼が入ってこれるだろうか。

お念仏の声するところ、仏様の住み給う家に鬼など入ってこれる筈がない。

このことを固く信じて、お念仏に励みなさい。

一声ごとに「仏様と一緒に、守っていただいているんだ」と心に刻みつけつつ、夜中で

も、いつでも、どこでも、不安になったら、お念仏を称えなさい。

十日や二十日ぐらいでは到底ぬぐい切れるものではなからうが、少しづつ、不安感がうすらいでくる筈だ。

これがあなたの修行なのです。あなたが悩んでいるその不安は、病院へ行っても治るものではない、お念仏に励むという修行によってこそ克服できるものである。

また、引越してきた日が仏滅だったと、おどかされているようだが、思い立った日、みんなの都合の良い日が吉日なのです。

だいたい、大安とか仏滅というのは、どうしてきめるのか知っていますか。簡単な数字合わせの類いですよ。

今日は五月二十六日ですね。旧暦では四月二十六日に当たります。だから今日は大安なんです。

つまり、旧暦の月である四月の「4」と、二十六日の「26」を足すと「30」になります

ね。その「30」を「6」で割ると割り切れます。割り切れる日が大安ということになります。

そのようにして「6」で割ってみて、「1」あまれば赤口、「2」あまれば先勝、「3」あまれば友引、「4」あまれば先負、「5」あまれば仏滅、という訳です。

あしたは、旧暦の四月二十七日ですから、「4」と「27」を足した数の「31」を「6」で割ると「1」あまります。ですから、あしたは赤口になります。

こういう単純な数字合わせで「日」がきまるといふことを知れば、仏滅などに惑わされるのは、全く根拠のない、絵そらごとの幻に悩まされることと変わりはありません。

ですから、引越しの日がたまたま仏滅であったとしても、その日がお宅にとって都合のよい日であった筈ですから、厄日などではなく吉日だったのです。

結婚式などは仏滅を私も避けましたが、深い意味があった訳ではありません。他に日も

あるのに何もわざわざ仏滅を選ぶとは非常識だといわれなくてもよいと、陰口をたたかれるのが嫌だから避けただけです。

うなづいて聞き入っていたが、次第に明るくなって冗談も出るようになった。

彼女に腕輪の念珠を与え、

「いつも仏さまと一緒にですよ」

といって、念珠を手首に通してあげたら、

「有難うございました」

と、今までに見せたことのない晴れやかな顔をした。

「その顔を忘れないように。特に子供の前ではもう二度と涙をこぼさぬよう、明るい笑顔で接しなさい。」

そして、悪魔のささやきに決して惑わされぬよう」

子供の手をとって、足どりも軽く去って行く後姿を、植込みのかげに消えるまで見送ってあげた。

# 仏説孟蘭盆經と目連變文



## 一、孟蘭盆經の内容

孟蘭盆すなわちお盆は、釈迦の弟子目連尊

静永賢道

(三重県伊賀町徳永寺住職)

者が餓鬼道におちた母のために、僧の安居の終る七月十五日に衆僧に供養することによって母を救うことが出来たと説く「仏説孟蘭盆經」によったものである。この「孟蘭盆經」

大目乾連冥間救母變文之書卷一  
 文第七月十五日有天子聖容戶也門閉三途等諸  
 衆僧安下此目乾連之神八部龍天盡來救我  
 此世福有影亡者轉生於勝處於是五百蘭盆  
 王尊信大衆之思救倒懸之急爲首佛在世時此  
 目連生後未出家時名目羅上深信三寶救重大衆  
 陳往他國貿易過即失念財寶令其後設設腐什什  
 僧說之來者及其罪之去後生極悔之心所願所  
 財近並救隱匿見子不經旬月事了還家母疑子玄依  
 齊作福因益與難免奉命終道願阿鼻地獄中受  
 苦願上三國禮畢遂即從仙出家求爾習回聞法  
 漢卑即以前願訪至竟慈願六道生死都不見父母連  
 悲該自思身慈何方受於快樂今時世尊報目連目連已滿  
 阿鼻則受諸苦汝雖位登重果如欲何為非十方僧衆解下  
 之自己來乃可救之故公慈悲開此方便月連孟  
 蘭盆者即是孝也  
 蘭盆道不廢精餐  
 一切天皆無世  
 今時仙自便遊迴  
 東西大將散天神  
 欲知百寶千花上  
 不能捨離去舍嘆  
 只恐惡業相逼迫  
 羅下自從父母沒  
 食言不背傷勸骨  
 式今奉道須來  
 誓首和尙南足尊  
 首前万字陶然  
 恰似天邊五色雲  
 直多平生罪業重  
 殊及慈母入台  
 苦海沉淪生死津  
 悲慈悲度年

一敦煌出土

大目乾連冥間救母變文〈首部〉

Stein 2614—

は極めて短編であつて、しかも前半を説明した後半は後世附け加えたものであるから、本来の原型は更に短かいものであつた。従つて内容は簡單で乏しく、また孝とか孝順をテーマにした極めて中国的色彩の強い經典である。

この「孟蘭盆經」の目連救母説話が中國及び日本で普及され發展した背景には、中國唐時代中期以後に流行した變文すなわち俗文學に負うところが多い。

## 二、目連變文について

この變文とは、仏教伝道のために用いられた語り物の台本であつて、一種の唱導文學のテキストである。難解な經典の主旨を文盲なる一般民衆に理解出来るように説いたもので、また物語に絵を画いて、絵を指し示しながら語つた一種の絵解きでもあつた。この變文の代表的なものは、今世紀になつて、敦煌の石

窟から沢山発見になった。

ここに言う「目連変文」詳しくは「大目乾連冥間救母变文」もその一つである。これには十数種を数えられているが、代表的なものに左の如きものがある。

スタイン本 大目乾連冥間救母变文

(S2614)

ペリオ本 目連縁起 (P2193)

この中、スタイン本「目連本文」は大正新修大藏経第八十五の古逸部に収録されていて、「孟蘭盆経」より長編であるが、今は容易に見ることが出来る。これについては矢吹慶輝博士が「鳴沙余韻解説」においていち早く紹介された。それによると、

「五言詩七言詩(叙事)より成り、經典の形式を取りつつ俗言雑語を交へし一種の仏教小説なり。首文の夫以、七月十五日者、天堂啓戸、地獄閤門云々は序にして、以下は七言一句中所々に五言句を挿入せり云々」と述べられている。要するに「目連变文」と

は目連にまつわる仏教小説ということである。

この「目連变文」の写本の題目に

大目乾連冥間救母变文并図一卷

とあって、并図の二字をうすく墨で塗りつぶしてある。これは「目連变文」が絵を伴っていたのに、写す時、文字だけ写して絵を写さなかったことによるものと思われる。だから「目連变文」の原型は絵をとまっていたもので、一種の総解きのテキストであったと思われる。

「目連变文」の中に「看よ目連が深山で坐禪する処を」とか「看よ母の飯処を」と言った言葉が見られる。恐らく絵を指し示しながら説明したのであろう。しかしこの絵は残念ながらまだ敦煌の石窟から発見されていない。

この「目連变文」も「孟蘭盆経」の伝承を継承して、まず七月十五日地獄の門を開いて孟蘭盆供養によって、亡者の倒懸の苦しみから救われることを述べている。しかし「孟蘭盆経」では目連の出自については、何も語っ

ていないが、「目連變文」では目連の出家以前の俗名を羅卜、母の名を青提、父の名を輔相としてゐる。目連は深く三宝を信じて、大乘を敬重していたが、母は生れつき慳貪であつたとして、母の性行を対照的に述べて、母の地獄におちた理由をあげている。「孟蘭盆經」では母が餓鬼道におちたとしながら、その理由については述べていない。

### 三、目連の地獄めぐり

目連は父から母が生前の罪によって、死後地獄におちたことを聞く。目連はただちに地獄に行き閻魔大王に会い、母の所在を問うと、五道將軍に問えと言われ、奈河の川、地獄の川を渡って五道將軍を尋ねた。

「目連大王の話を聞き、便ち大王を辭して出で、行くこと数歩にして奈河の上に至る。見るに無數の罪人、衣を脱ぎ樹上に掛く。大きく哭くこと数声、河を過ぎんとして、

過ぐるあたわず、廻々惶々、五五三三頭を抱えて啼哭。目連その事由の処を問う。

奈河の水は西流して急なり、

石を砕き巖をけずり、行路難決す。

衣裳は脱して樹枝に掛けしも

逐われて、交時なく向いて立つ」

地獄の風景を叙しているが、この中「衣を脱ぎ樹上に掛く」云々は我が国の冥界物語における奪衣婆、懸衣翁の説話の原型を思わせる。

目連は刀山地獄と銅柱鉄床地獄を経て更に一地獄に至り、獄主から母が今、阿鼻地獄にゐることを聞き、仏の力を借りて阿鼻地獄に行こうとする。この阿鼻地獄の描写は悲惨をきわめている。目連はそれを見て慟哭する。

この目連の地獄めぐりは「孟蘭盆經」にはない。「目連變文」の創作である。

目連は波羅林に逗留する仏から、十二鑽の錫杖を授けられて阿鼻地獄へ直行する。第一隔から順次に母を探し求めて、遂に第七隔に達し、漸くにして四十九本の釘で身体を鉄床

に打ちつけられている母を見出した。獄主が「青提夫人しょうだいふじんはいるか」と呼んでも、別の責苦を加えられることを恐れて返事をしないでいる。また門外に出家した子供が来訪したと言つても「自分の息子で出家したものはいない」と言う。そこで目連が事情を説明して漸く、母子対面となる。

目連は母が地獄で苦しむのを目前に見て嘆き悲しみ、再び仏の許に赴き、母の救済を懇願した。そこで仏は帝釈たいていしやく、梵王ぼんおう、八部神衆はつぶしんしゆ、四天王らをひきつれて地獄を破壊した。その結果「罪人総て天上に生まるることを得た」が、目連の母は罪根深きため、業ごうの力は排し難く、地獄からは救われたが、今度は餓鬼がきどう道に生れかわり「月を重ね、年を経て餓鬼の苦しみを受けた」のである。

ここで「孟蘭盆経」で母が餓鬼道におち入り、飲まず食わずのひもじさに、骨と皮となつている説話と合流することになる。

「目連変文」では更にこの母を救わんが為

めに王舎城内で乞食をし、母に鉢はちと飯めづを奉つた。しかし母は地獄の苦しみに遭つたにかかわらず、まだ慳貪けんどんの心が無くなつていない。折角、飯を与えられても「食口しょくくちに來つて猛火に變じ」て食することが出来なかつた。これは「孟蘭盆経」の叙述と合致するが、「変文」ではここに至るまでの物語が長い。

#### 四、七月十五日の孟蘭盆供養

目連はこの母の餓鬼の苦しみを嘆き、仏に救済を懇願した。そこで仏は目連に「七月十五日に広く孟蘭盆うらんぼんを造れば、始めて食するこゝとが出来」と教えたのである。それに対して目連はなぜ七月十五日かと問いかえず。すると仏は「七月十五日は羅漢得道の日であり、提婆達多だいばだたの滅罪めつざいの日であり、また閻羅王えんらかうの歎なげ喜日であるから、一切の餓鬼はすべて、飽満ほうまんし得るのだ」と答えられた。

そこで目連は仏の教えに従つて、王舎城辺

の塔廟の前で大乗經典を読み、盂蘭盆を造つて供養すると、母は漸く満腹することが出来た。

ところが食事を終えると母の姿が見えない。また餓鬼道に戻ったのかと心配し仏に尋ねると、仏は「お前の転經の功德と盂蘭盆の善根によって、お前の母は餓鬼の身からのがれることが出来たが、今度は畜生道に生れかわり、今王舎城内で黒狗になっている」と言い、更に続けて「お前が母に逢いたければ、心行平等に乞食して、貧富を問うな」とさとされた。

目連は仏の教えに従って、王舎城中を托鉢して歩いてみると、ある長者の家の門前で、一匹の黒狗を見つけた。黒狗は目連の袈裟を捉らえて、狗身の苦しみを救うてくれと哀願した。そこで黒狗になった母を伴うて、王舎城の仏塔の前で七日七夜の間、大乗經典を誦したので、その功德によって母は狗身を転ずることが出来、狗皮を樹上に掛けて女身に

還ることが出来た。そして沙羅双樹下の仏を三匠して、母は遂に西方仏国に往生することが出来た。

円仁の「入唐求法巡礼記」第一によると長安の街に俗講法師がいて、俗講がさかんなされていたことが記されている。俗講とは僧が広く俗人を対象として寺院に定期的に行った通俗的な説法であるが、それは仏教説話を絵にかいて、その絵を指し示しながら語った絵解きである。これによって当時、長安の街や、敦煌の沙漠のオアシスの街の寺院で「目連変文」などの絵解きが語られていたことが想像される。

前述の如く「目連変文」も「盂蘭盆經」の目連救母説話を通俗的にまた文学的に潤色再構成して語り、聞く人たちに大きな感動を与え、「盂蘭盆經」の発展に大きく寄与したのである。

# 浄土句集

## 一田牛畝選

評 降っては直ぐ消えるのが淡雪である。

それが砂場ともなれば直ぐに吸われて消えて行くのである。

福岡 荒牧 還愚

歌ふあり踊る輪のあり花筵

京都 岩井 伏水

巡教や桜追うての旅となり

熊本 山崎 石庭

泣き笑ひして打明くる彼岸婆

福岡 上滝津弥音

小走りに小走りに野路春時雨

群馬 島津 か寿

山はよし思はぬ余花に逢ひもして

山形 松田 光蒼

陽炎に朱き五重の塔燃ゆる

東京 安居 頊樹

梅一輪手術も癒えて日野の里

評 手術をして貰ったが、癒えて退院した

東京・日野の里には梅も開いて迎えて呉れた。病後の経過も嘸ぞかし順調で、暖かくなる日を授かれることならん。

山口 上野 明達

ガンジスの永久の流れに散る蓮

評 仏蹟を巡られガンジスの流れに佇まれたのである。大きな流れに敬慕の昔と変らぬ様に蓮が散って人々を楽しまして呉れたとのこと。嘸ぞかし忘れられぬ景ならん。

山口 上野 明達

嘲や教会の窓開け放つ

東京 真野よし子

評 暖かくなれば窓を開きて風を入れたくなる。開けば嘲が自在であり教会も楽しいことにちがいない。

山形 松田 允子

かげろふや明治の母に歩を合わす

評 上天気となった。明治の母は足も思う通りに運ばぬ。その母に歩を合わせての道、きつと母思ひの子ならん。

東京 細田 初枝

淡雪の砂場に吸われゆきにけり

福岡 服部 光代

安藤平次郎

神奈川 鈴木美智子

大観峰阿蘇の寝釈迦も遠霞

新しき窓開け放つ小米花

境内をなみなめに桜ちる

熊本 山崎 松子

東京 末常てる子

三重 山田 歌甫

河豚獲る灯鳥賊掬ふ灯と夜毎燃え

うららかや今朝電線に雀二羽

晩鐘の余韻に昏れて麗月

山口 三井 寛静

東京 満尾衣有子

福井 深井 鉅士

春の陽に廿五菩薩面揺れる

連翹の黄の満ちたりし夕べかな

なんなんと積木で出来し春日和

福岡 原 敬二郎

東京 猪瀬 幸子

福岡 権藤みきを

笑いつつ刎ねる白魚噛む女

さわさわと風が音生み五月来ぬ

筑水に臨みて梨の花の山

東京 野本 知子

東京 栗原やえ子

福岡 前田 秀峰

寺の名のバス停多し梅さかり

鈴振って和讃の舞や寺の春

雨に裾からげ満座の御忌の衆

東京 真野 竜

東京 小笠原香祥

福岡 釈河野ねはん

晋山の奉告朗々春の寺

一時を花のベンチの客となり

今日虚子忌花の日和を授かりし

大分 丹羽 難中

東京 田中 秀代

福岡 木下富士女

写真撮る花散る下に稚児佇てる

気安さにときを過ごせり春の月

南風机上の白紙散りにけり

福岡 山崎 鬼川

東京 吉原登起子

鯖鈴群れ刑場址に人棲ます 一田 牛畝

柿若葉花嫁の行く里の道

畝に腰流れのままの芹を見る

心のはなし(上)

人間万事塞翁が馬

曾<sup>そ</sup>田<sup>だ</sup>文<sup>ふみ</sup>雄<sup>お</sup>

○

仏教で「因果」とは深い意味を有するが、いまは単純な因果にまつわる事を述べたい。

人間たるもの、この世に生を受けて人々と付合い、社会生活を続けるからには、実にさまざまな事件にめぐり合うものである。その場合、左様な一つ一つの事件が今後の生活の上に、果してプラスするものやら、

その反対となるものであるやら、時間をかけて長い目で見定めないう限り、容易には決定し難いものなること、皆が知悉しているところである。

例えば、人によつては、何気なく買った「たからくじ」で多額の賞金を手にすることもあろうし、また、これまで何不自由なく五体健全の毎日を暮してきたものが、思いもかけぬ輪禍に遭い、一生を通じて体が思うに委せぬ日々を送らざるを得なくなることだつてあるかも知れない。

その際、めぐり来つたその出来事が将来の生活の上で、幸いをもいらすものとなるのか、逆に不幸の種となるものなのか、予測は極めてむずかしい。

右に挙げた例でいうなら、「たからくじ」の場合、万事は金の世の中、とはいふものの、一旦は「くじ」の御蔭で数千万円が手に入つて大喜びしたはよいが、斯様な大事は、どんなに隠そうと努めても必ずや他人の知る所となるのが常で、見も知らぬ人からたかられたり、強迫めいたゆすりをかけられたりして、身辺に不安を覚えるような心配が絶対起らない、とはいひ切れず、そうでなくても、金の入つた事で気が大きくなり、賭け事に手を出したりした揚句、肝心の金が消えるどころか、反対に借金で苦しみ、家庭さえ目茶苦茶、といった結果を招くような悲劇が新聞紙上を賑わしたりする。かかる場合には、なまじつか金を手にしない方が良かった事にならう。

いま一つの例、輪禍に遭う、という方では、かの「塞翁が馬」のたとえを思い起すなら、必ずしも丸々の不幸とばかり嘆くには当らずして終る場合だつて無しとしない。

「塞翁が馬」のたとえ、今更説明の要もあるまいけれども、念の爲概略を記すなら、左の如き内容である。

昔、中国の国境の辺りに老翁が住んでいたが、この老翁は馬一頭飼つていた。ところがある日、この馬

が逃げ出してしまった。近所の人達が「惜しい事をした」と慰めることばをかけるのに対し、この老人は一向に惜しがったりしていない様子。数日経ってその馬が戻って来たが、それは、その馬一頭だけでなしに、立派な別の一頭と連れ立って二頭となっていた。人々が良かったとうらやむが、この翁、ちっとも嬉しそうな素振りを示さない。月日経って、翁の子供がこの新しい馬を乗り廻しているうちに、落馬して腕を折ってしまった。また人々が「不幸な出来事で」と慰めるのに、老人、平気なもの。やがて戦争が始まった。若者が次々に徴兵されて戦場に駆り出されている時、翁の子供ひとりは、腕が利かぬ事の理由から徴兵されるのをまぬがれた。戦いに他の若者達は皆命を落して行ったのに反し、翁の家だけは戦死者を出さないですんだ。

右の如き話である。中学時代、漢文の時間に「禍福はあざなえる縄の如し」に始まる文を習った記憶を持つ。

事は左様に、その時その時にいくわす出来事が、時間をかけて見守っていかないことには、それがわが身にとり、及ぼす影響が吉と出るか凶と転ぶか、速断できかねる事を説いてもいる。古典の一つ『十訓抄』に「馬のもたらす一喜一憂に動ぜず」と述べているが、まことにその通りである。

「塞翁が馬」の内容とはいささか異なるけれども、白居易の『白氏長慶集』には、「新豊折臂翁」という文が載せられてある。塞翁に同じく、中国の新豊なる地で白楽天が出逢った臂の折れた翁から聞いた話を伝える。この翁は徴兵を避けんが為、自分からわざわざと臂を折ったのであった。しかし、その結果、弓が引けないという理由から徴兵されずにすんだ。その為、友人すべてが戦死した後も生き永らえることが叶い、孫まで恵まれた。曲った臂は、夏の暑さ寒さが今もって傷口にこたえはするものの、命には替え難いこと、と告げたという。はたから見れば、如何にも気の毒としか映らぬ姿も、当人にとっては左程不運をもたらす

ばかりとは限らぬことになる。



一体に、何を不幸と見做すべきか、分ったものではない例として、身近なところで、父を引合いに出そうと思う。

昭和十二年に始まった一連の大戦で、その最初の年から戦場に駆り出されていた父が、度重なる負傷の末、やっと召集を解除され、松葉杖に頼りながら帰って来たのは、昭和十七年、アメリカと直接戦いはじめて翌年のことだった。

たとえ片足を引きずってしか歩けない不自由さは残るにしても、命を失うよりは益<sup>キ</sup>し、と本人はじめ皆一様に信じていた。

しかるに、十九年夏、または召集されて浜田連隊に入隊。数日して早くも西へ向って出陣。何日かして、西とはまるで逆方向の横須賀気付で軍事郵便が届き、それと明記されてはいないにしても、どうやら行先が南方らしい事だけは悟れたが、やがてそこが硫黄島、と、これは噂で知ったものだ。

硫黄島がアメリカ軍の攻撃を受け、守備隊全員が玉砕したのは、それより数カ月経て後の事だった。街で会う人から悔みをいわれ、いわゆる遺族の一人になったのか、とわが身わが心に納得させようにも、戦死の公報すら受取らないでいる状態のうちに敗戦を迎えたのであった。

当時の筆者は、といえば、エンタルピ・エントロピといった得体の知れない術語に目を白黒させては、元来が不得意な理科系の講義に苦しみながら、情性のおもむくまま、高等工業学校に籍を置いていた。呉軍港では、日向・金剛など、無敵を誇る連合艦隊の殆んどが沈没し去っていると、呉出身の学友がこっそり洩らした情報にも、なお日本は勝つに違いないと信じきっていた程で、敗けた、といくらいわれようが、敵が目

の前まで攻めて来ているわけではなし、どうにもピンとこない感じを抱きつつ、ずるずる学校と寮とを往復するばかりの毎日が続いていた。

父から便りがあったのは、敗戦の年、二十年が終ろうとする頃のこと。父は硫黄島ならぬ小笠原で生き延びていたのであった。後から聞けば、噂は偽りでなく、確かに硫黄島へ向け出港したものの、父の乗る第一船が敵潜水艦の雷撃で沈められ、太平洋を五時間も泳いだ揚句、ようやく駆潜艇に拾い上げられ、父島まで運ばれた由。その間、沈み行く船の最後を見届けんとして見え隠れする、敵艦の潜望鏡目当てに味方が投下する爆雷の衝撃を全身に浴びながら、その時には、逃げまどつてぐるぐる廻るばかりの他の船上にいる兵隊達が実にうらやましくてならなかった、という。

しかし、それらの兵士達は、間もなく全員共硫黄島で玉碎し終えたわけ故、思えば父の命は、アメリカ海軍が救ったことになる。つれて筆者の運命までが、工科から文科に移る結果を生んだ次第でもある。

事ほど左様に、事件の渦中に身を置きながら、瞬時をもつてする状況一つに頼るだけで判断を下すなら、絶対不幸としか解しようのない事態も、あにはからんや、しばらく時を経ての後であれば、まるで反対の、幸いの糸口にも繋るものなることが分かるわけであって、幸・不幸なるもの、一概には決め難いもの、とつくづく思うことである。

苦しみの最中に身を委せている際であれば、幸福がすぐ隣りまで近づいている、否、その苦しみ悩みこそ幸福の根源となるもの、などとは後になっていえること、その場に臨んでいる時には到底納得できよう筈がない。けれども、前記した父の例から考えても、人生には正にその如き現象が一度ならず繰返されているのではなからうか。気短かに判断を下すなど、とんでもない事である。一生は長い、じっくり腰を落着けて事の行方を見定めたいものである。

# 立ち止まるな 善導

〈1〉

## 寺内大告

挿絵・松 濤 達 文

### 前 章・絶 唱 の 経 典 (一)

一

タバス(熱)尊者は、すでに長い旅から帰  
投していたのだった。

誰も気づこうとはしない。法師も、信徒の  
男女たちも。

何ということだ。仏塔における最高の指導

者、最長老と仰がれたタバス尊者が二年ぶりでこの洞窟へ戻られたというのに。

みんなもみんなだが、尊者自身なぜ帰投を告げようとはしないのか。少年サビヤはいぶかしげな眼で礼拝者たちの後ろ姿を見つめた。

そのとき、またしてもあの玲瓏な金属音が洞窟内に響いた。まぎれもない。タバス尊者



が腰から片時も離さない波羅門鈴だ。たしかに礼拝者の群中に尊者は混じっている。

「鴉の町」朱駒波域で二十日間ばかりをすごした髪童子サビヤは、真紅の落日を背に浴びながら大崖仏塔へ登ってきた。夕べの礼拝に間に合って、ただちにその座へ投じた。

大石窟の中央上壁には釈迦牟尼世尊が刻みこまれていた。ただし後に見るような体線をなぞった仏像ではなかった。大輪の葉を繁らせた菩提樹が一本、すげなく刻まれているだけだった。

体線を再現することは不敏な所業、とインドの古代文化は断定している。釈尊像を描くにしても誕生仏は蓮華、成道仏は菩提樹、そして涅槃仏は卒都婆だった。ちなみに経典もサンسكريットという立派な文字が実在しているもそれで綴るようなことはなかったのである。文字化したのは、かなり後世になってからである。すべては僧や信者の脳中へ叩きこまれ、暗誦によって伝承した。

最前列に坐る六人の法師たちのリードで、数十人の善男善女は急テンポで経文を合唱している。合唱のさなか敬虔な拝跪をくり返した。

あの鈴が鳴り響いた。間違いなくタバス尊者愛用の鈴だ。

この山中で暮す男女たち。鈴を身におびる者は珍しくない。鈴音には、「除魔」の呪力がある、と信じられていたからだ。ただし山家の鈴は土か木製である。丸(がん)が転ろがる響きは鈍重で不透明だった。インド中部の富豪の家庭に育ったというタバス尊者が母の遺品にもらったその鈴は、円筒型の外器も内球も精巧な銅製であった。

旅立つ日まで尊者の身辺に仕えてきた髪童子である。サビヤというインド名も師から与えられた。あの高貴な音色を聞きたがえるはずはない。

だが礼拝の列中に尊者らしい後ろ姿は見あたらなかった。とすると……不吉な予感がサ

ビヤの胸をかすめた。此処にいる誰かが尊者を旅中に襲い、あの鈴を強奪したのではなからうか。

礼拝が終った。法師たちは中央岩壁の底部にくくり抜かれた小洞窟へ引揚げていった。そこに彼らの私室がある。当然タバス尊者の分も最奥に位置していたが、現在は空房である。信徒たちは礼拝所で幾組かの円座にわかれ、夕餉の会食を始めた。配られた木椀の内容はいつも麦麵である。麦粉を蜜で練り、穀類などが混ぜこんであつた。

食糧の乏しい山中だ。信徒たちは獣や鳥を追ひ、溪流の魚を捕らえる。それらの獲物を麓の町へ運んで麦や穀物と交換するのだ。今そそくさと食べ終えて、木椀へ追加の麦麵を盛り付けてもらっているのは、わが家に子供を残してきた者だ。つまり夕べの礼拝後に与えられる麦麵こそは、親子の露命をつなぎ精気を支えるだいじな糧（かて）であつた。

これが初期大乘教団の原景だったと言える。

山中深い石窟を自分たちの手で仏塔とし、そこを信仰の拠点としたが、同時に生活のすべてを持ちこんだ。信徒のなかには町の人間も多数混じりこんでいた。なぜ彼らは家を捨てて山暮らしを求めたのだらうか。

町の新しい支配者が大乘仏教をきびしく断圧したからである。信徒たちから、「青衣の鬼」と恐れられた新王は、小乗僧らの進言をいれて大乘派の追放に躍起となつた。

宗教において断圧の苦痛は信者たちの肌を強靱にする。大乘教徒たちが自らを「菩薩」と呼んで仏陀への憧憬を深め、団結を固めたのはこのころからであらう。後世の研究者は大乘仏塔教団内の尊者や法師を「出家菩薩」と、信徒の男女を「在家菩薩」と呼んだ。

髪童子サビヤは円座で夕餉をとる菩薩衆を注意深くあらためてみた。タバス尊者らしい顔はなかった。

にもかかわらず……再びあの振鈴音を聞いて

た。

不吉な予感的中しそうだ。旅中の尊者を襲って鈴を奪ったのは暴虐な「青衣の鬼」の配下ではなからうか。在家菩薩の群れへまぎれこんで、一気に大崖仏塔の覆滅を企図しているのかもしれない。

円座を脱け出してゆく黒い影――

明らかに鈴はその腰のあたりで鳴っている。黒い影に見えたのは、その人物が狼とも山犬ともつかぬ獣皮を頭からかぶっていたからである。

女、それも老婆らしい。獣皮の頭頂で三本の木製の角(つ)の)が突き出ている。ただし三本とも尖端は折られてあった。

突厥(とっけつ)女の風俗である。この角は中央が夫で、左右は舅と姑とを意味する。尖端が折られているのは、それら眷族たちがすでに死亡した事実を物語る。

突厥族は沙漠をさまよう牧民である。俊敏、慥悍な性格がむき出しになって中央アジアに

勢力を拡大したのは六世紀あたりからで、この時期は各地に雑居していた。ここパミールの山嶺地にも入りこんで原住民と共存していた。

サビヤは石窟の出口へ急ぎ先まわりして突厥女を正視した。そこで灯る燃石の光茫が顔の細部を映しだした。

いちめん髭でおおわれた老婆……ではなかった。サビヤはうめき声を発した。

「タバス尊者ではありませぬか」

二年前まで尊者とだけかわっていたインドの言葉で呼びかけた。

「尊者など止せ」

きびしく突き放したが、獣皮の下で眼は微笑んでいた。

「いつお帰りですか。なぜそのような蕃衣をかぶっているのですか」

「蕃衣だど? 沙磧の地で生きるにはこれしかない」

質問したいことが次々とつらなりそうであ

る。それを制してタバス尊者は大股で石窟の外へ歩きだした。

「わしの住居へゆこう」

住み馴れた仏塔の小洞窟を放棄して、大崖外の住居から信徒なみに通つてくるとは、どういうことであらうか。

二

大崖の仏塔はバミール山嶺が東方へ向つてようやく下降しはじめる長大な尾根上にそびえ立っていた。岩石の瘤で、自然の風化が内部を抉ぐり、そこに熱禱の宗教殿堂が現出したのである。

南側はゆるやかな斜面がひろがる。ゆるやかに見えるのは大崖石窟から俯瞰するためで、現実には歩くと幾重もの岩壁の皺にさえぎられる。この皺があるからこそ町の追手が登って来られないのである。

岩壁の皺は、あちこちに風溜りの窪地を抱えこんでいた。溪流が走り、信徒たちの住居

は殆んどがそこにあった。大崖仏塔からは直視できないが、皺の先端に立って遠望すると緑地が見え遙かな城壁もとらえられた。朱駒波城だった。町の上空は墨を流したような色で染められている日が多かった。雲ではない。なぜか鴉がいつも町の上空で群舞しているのである。ために山民は「鴉の町」と呼んだ。七世紀になってこの朱駒波を通過した唐の玄奘三蔵も古い呼称で紹介している。

大崖仏塔の北面、此方からふり仰いでこそ「大崖」に実感がこもる。断崖が奈落へ逆おとしになって切りこまれている。すり鉢型の基底部には青みどろの池があって、旅人は池のふちをたどって東西を交流するのだった。池の彼方は、さらに巨大な山塊がそそり立ち、胸から上半は層氷消えることのない雪山である。

タバス尊者の新たな草庵は、この北斜面の一角、岩瘤が笠のように突出した顎の下にあった。手造りで囲ったのだらう。石塊を積み

あげて壁がわりにし、正面の扉は池畔から一本づつかつぎあげてきたにちがいない枯れ木を並べてふさいでいた。ふさいだにしても前面の雪山から吹きこむ寒風は容赦なく狭い庵室を冷やした。仏塔内の小洞窟とは比較にならない居心地である。

「なぜ、こんなところに？」

獣皮をひろげ坐りこんで、燃石を灯した尊者に訊いてみる。

「あそこにいると、尊者などと呼ばれる」

「尊者がいけませぬか」

「お前が髪を剃ったりして、まめまめしく仕えてくれる」

「当然でありましょう。尊者はそれだけの徳と学殖をかさね、さらには齡（よわい）を深くしておられます」

「仏の慈しみを受ける者に徳や学殖、長幼の差別はない」

「二年に及んだこの旅で尊者はそれを学んでこられたのですか」

「尊者……もういい加減に止せ」

「では何とお呼びしたら？」

「そうだな。蛸（い）がよい。ネズミと呼ぶのだ」

「ネズミ……」

少年に答えてタバス尊者は旅中の体験をも静かに語りはじめる。

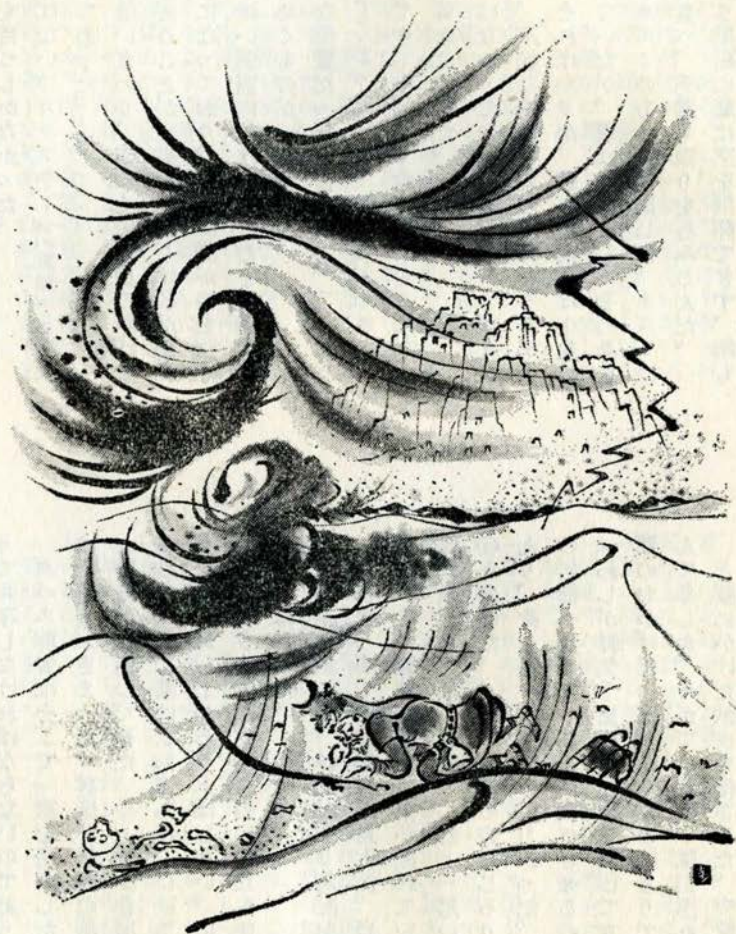
東國の大沙漠を旅していた。旅する、とは言ってもすでに目的地は錯乱の彼方に没し、進路も足下から消えた。同一の地域を周回するだけだったのかもしれない、とタバス尊者は註した。

人影はおろか一木一草すらない沙磧の海原だ。砂丘の涯てに突如として城塔の林立を望見することがあった。やれ嬉しや、と砂丘へ駆け登ると、鉛色の砂地と生気を失った空がひろがるばかり。幻影の化城だったのだ。

ある日、この化城が消え去った虚空に巨大な黒竜が天地を貫ぬいて立ち上がった。タバス尊者目がけて襲いかかってきた。四囲は漆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

カラブライン  
(黒魔)



黒の闇となり尊者は砂上に突っ伏して生命が絶えるのを待つしかなかった。

黒竜ではない。カラブラーン(黒颯)と呼ばれた砂嵐であった。

砂上を這いまわり、辛らくも砂丘のかげまでにじり寄ることが出来た。そこは砂が切れて岩棚状になっており、底部に洞が口を開けていた。暗い洞窟内へはいりこむと、奥で何やらうごめくものがある。

大ぶりの秃鷹だった。足下で蜷(ハリネズミ)がうずくまっている。秃鷹はこのネズミを捕らえてきてゆっくり食べるつもりだな、とタバス尊者は考えた。

そうではなかったのだ。鷹とネズミは身を寄せ合い、不安な眼で砂嵐の外界をうかがっている。そればかりか、彼らの前には小魚が横たわっていたが、鷹はくちばしでその身を千切るとネズミの方へ投げ出した。ネズミは分け前を食べ、秃鷹も残りを呑みこんだ。

荒れ狂う黒颯に鷹は空を飛翔できず、蜷も

土中を這いまわれなくなった。獲物を分け合って共存しなければならぬのであった。

タバス尊者はそこで一夜を明かした。翌朝は黒颯もおさまった。尊者が岩棚の洞を出ると秃鷹が追尾してきた。砂上を歩き出したが、奇妙なことに鷹はよちよち歩くだけでいつこうに空へ舞い上がろうとはしない。いつか案内者のように先に立って長い砂丘を徒歩のまま登りはじめた。

ずいぶん歩いた。砂丘が下り勾配を示したとき、ゆくてに亀裂が見えた。岩肌が剥がれ、その底部を巻いて泉が流れていた。秃鷹は泉へくちばしを突っこむと一尾の小魚を咥えあげた。タバス尊者の方をじろり振りかえり、身も軽々と空へ舞い上がった。再びあの岩棚へ戻ってネズミに食べさせるのだらう。「わしが睥気千里の大砂磧を脱出できたのも鷹のおかげだった。この泉のほとりで庵を結んで暮した。やがてこれの一隊が現れた」

と腰にかけた獣皮を指さした。突厥族が通

りかかったのである。大沙漠で生きる彼らは水源の所在地を熟知していたにちがいない。タバス尊者は一頭の駱駝を与えられ、しばらくの期間、突厥族に混じって沙漠で生活したという。

「わしもネズミもあの鷹に救われた」

尊者の言葉を少年はやんわり押し返した。

「しかし、ほんとうに尊者たちを救ったのは泉を泳いでいた小魚ではありませんか」

「小魚か……童子奴、いつから理屈をこねまわすようになったか」

留守の二年間ですっかり大人びてきた髪童子サビヤの肉体。そのうちにこもる精神の成長を透視するように尊者は眼を細くした。

「童子、靈鷲山のことを知っているか」

「はい、いつぞや尊者からうかがいました」

インドのマガダ国。王舎城の北方にそびえる山だ。釈尊が弟子を集めては説法した有名な場所である。

「こんどの旅であの山にも登ってみたぞ。往

昔、阿難尊者が大鷲に襲われたという跡の巨石の上にも立ってみた。空はまっ黒になるほど鷲が群舞しておつてのう」

「仏陀やお弟子にその鷲らは危害を加えなかったのでしょうか」

「黒月の夜に阿難尊者を襲った大鷲もかたわらに釈尊が実在されたからこそ危害が加えられなかった。しかし今は釈尊が入寂されて久しい」

「尊者が靈鷲山の山頂に立たれたとき、空の鷲どもは襲いかかってきませんでしたか」

「そこだ、サビヤ。一羽も舞いおりてはなかったぞ。しかし、一羽もわしがいる間、頭上の空から立ち去ろうとはしなかったぞ」

「それはどういうことでしょうか」

「ねらっているのだ。わしが倒れるのを待っているのだ」

「倒れるのを待つ？」

「倒れた途端に奴らはいっせいに襲撃してくるであらう。わしの肉を喰いちらすにちが

ない。いや釈尊在世の折でも靈鷲山の鷲は同じだったはずだ。正面から戦いを挑まず、じっくり相手が自滅するのを待つ。釈尊の宏大無辺なお力とは、決して蛮勇剛力ではない。差別なき博いお心、生きものへ寄せる限りない愛……鷲はこれに刃向うことが出来なかったのだ」

「……」

「わしはインドから諸国をめぐり、沙漠へ出て、あの鷹や蝟と出会って、初めて理解できた。鷲がねらう自滅とは何か。同じ仏弟子でありながら大乘だ、部派法師だと争い続ける確執。これこそ奴らに死肉を喰らわせるまたとなひ好機となる。他派との確執だけではない。わが仏塔の内部自身にも問題がある。尊者なぞと呼ばれて一段と高い席に坐る者。あの岩柵の洞窟では人間も鷹も蝟もなかった。一尾の小魚を分け合って生きたのだ」

いまタバス尊者は大乘教団の姿勢を、きびしい自省のなかで根源的に把握し直そうとし

ている。長い旅から帰投しても旅前の椅子に坐らず、突厥の獣皮をかぶって信徒の群中へ身をひそめたのもこの自省を実践したまでなのであろう。

それにしてもこの二十日間余り、朱駒波の城内で見聞した情報を少年サビヤは無視することはできなかった。城内にひそむ大乘教徒たちは連日のように引きずり出され、拷問、処刑がくり返されている。暴虐をほしいままにする「青衣の鬼」や彼らに追従する部派法師——小乗僧の背信行為をも許せと言うのか。慈しみ合って共存せよと言うのであろうか。だがサビヤはそれ以上この問題を論じ合うことはできなかった。すでにタバス尊者は瞑想へはいっていった。

長年にわたって仕えてきた少年サビヤにはその気配、息づかい一つでわかるのである。瞑想へはいった尊者は他界のすべてを拒絶してしまふ。

燃石の炎が尽きた。サビヤは新しい石に点



示してきた。

「全インドからかき集めても一億金にも満たない」

とインド王が泣きを入れると、カニシカ王は、

「城内に大宝が二つあるではないか。一つは仏鉢、一つは名僧。両者を合わせれば充分に賠償に値する」

かくて仏鉢と名僧を得たカニシカ王は、困みを解いて本拠地ガンダーラへ引揚げていった。

臣下たちが名僧の価値に疑念を投げかけたとき、カニシカ王は七匹の馬の前で説法をさせた。すると馬どもはらはらと落流しながらこの説法に聴き入ったという。

名僧はかくて馬鳴菩薩と呼ばれ、カニシカ王の精神上的の指導者となった。馬鳴は大乗仏教の核心を語る「大乘起信論」の作者と言われている。

この馬鳴の師にあたる人が脇尊者である。

脇尊者は、三カ年に及ぶ修学中かつて一度も脇を床に接したことがなかった。つまり横臥、仰臥など寝なかったことを意味する。脇尊者の異称が由来した。

カニシカ王はこの脇尊者を招いて、有徳な学僧を集め經典の再編集を求めた。王は首都のガンダーラを推挙したが、脇尊者はカシミールを主張した。王はその主張をいれ、首都のスリナガルに大伽藍を造立した。釈尊滅後、最初の「王舎城結集」にちなんで五百人の識者が集った。「カシミール結集」と呼ばれる大会議であった。主として小乗派經典をまとめあげることとその十二年間が費されたので「大毘婆沙論結集」と呼んだりもした。

この呼称には当然、結集を卑小化し輕視する意図が露骨である。大乘教徒らによって喧伝されたことは言うまでもない。結集への参加者を五百羅漢と呼び、自分ら菩薩との間に格差を付けようとした。

師の脇尊者が小乗結集のリーダーであり、

弟子の馬鳴が「大乘起信論」の作者だという事実、このカニシカ王朝紀における仏教教団の複雑な断面が覗けるであろう。

さて、そのカニシカ王朝が減んで出自血統も定かでない訶利多種が新しい支配者となって君臨した。「買われた人」の訛まりだと言われる新王者には前帝の権威も実力もなかった。版図はガンダーラやカシミールの山岳領域だけに限定されてしまった。

西方の安息人とは戦うごとに敗北し、大月氏族の残党にはつねにおびやかされた。インドはすでに巻き返した土地の王たちによって主権を奪回されていた。

訶利多種王族は狭隘な封土を維持するだけが精一杯だった。青衣を着こんだ城兵はもっぱら仏教徒に断崖の鞭を加えることで活性化をはかった。断崖の手段には、成立時のそもそもから「上座部」と呼ばれ権力と癒着し易い小乗仏教の体質を利用した。「大衆部」として組織力も弱い大乘仏教徒が集中攻撃のマ

トとなった。カニシカ王政期に謳歌した「宗教の自由」は跡方もなくなり、大乘教徒たちは深山や谷間の石窟にこもって信仰の純粹さだけを保とうとした。

「サビヤよ」

長い瞑想のあと、タバス尊者はいきなり鋭く呼びかけながら獣皮の座から立ち上がった。岩頭まで進むと片膝をそれに托し、断崖を覗きこむ姿勢になった。少年も傍らへまで進み出た。

「今夜は池面がよく見える」

そのとおりで、凍結した月光が鋭利な刃のように遙かな眼下の池面へ突き刺さっていた。巨竜が棲むと言われる古潭だった。

「サビヤよ」

「はい」

「霊鷲山へ登ってゆく麓にも池があったな。ビブラの池と呼ばれた。池水は熱湯だ」

「熱湯の池ですか」

「ストゥーバの塔や精舎の跡があった。つま

り温泉なので暮すにはまたとない土地だ。わしも四カ月近く滞在した」

「旅の疲れを癒やされたのですね」

「そこに滞在中、有徳の老仏者と知り合つてな。珍しい經典を習熟させてもらった」

「珍しい經典を、ですか」

「スカパティ・ビューハという。極楽莊嚴經だな」

「極楽界のことが説かれているのですね」

「そうだ。極楽界の有様と、そこへゆく方法とがな」

「方法までがですか」

「サビヤよ、その經典を今夜からお前にも伝授してやろう。あの月に磨かれた池面を覗きながら誦經すれば、いっそう理解も容易になるであらう」

タバス尊者はゆっくりとその極楽莊嚴經を一句づつ少年サビヤへ口伝していった。当時のインド、立派なサンスクリットという文字がありながら經典は絶対に「文字化」しな

ったのである。文字化は經典を汚染させる行為だ、と考えられた。すべてが暗記である。形なきもので人間の脳中へ封じこんでしまわなければならない。

經典の文字化は三世紀も半ばを過ぎたあたりから実現しはじめたことが文献学上、実証されている。それもインド国内ではなく、外周の中央アジア地域だと言われる。

文字化されず、聴覚だけで記憶中枢へ流入してくる仏典。それはそれで現代人が想像するほどの難事ではなかったようである。ましてや抜群の頭脳を持つ神童とうたわれた髪童子サビヤであった。極楽莊嚴經を暗（そ）らんとする日はそれほど遠い先のことではないだろう。

極楽莊嚴經。梵文では後に「大乘」の二文字が付されたようだが、漢訳ではこの經典を「大無量壽經」と称した。

(つづく)

# 木彫像・欄間・一品作



## 千手観音像

天地八尺

桧 材

24K仕上げ

真心値

山形渡し ￥270万

▶ご一報下さればご相談に応じます。

有限会社 源 田

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄 土 五十巻 七月号

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和五十九年六月二十五日 印刷  
昭和五十九年七月 一日 発行

編集人 宮 林 昭彦  
発行人 佐 藤 密雄  
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒 〇三 振替東京八―八二―一八七番

◇◇竹中信常博士頌寿記念論文集◇◇

宗教文化の諸相

〔編集・発行〕 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

〔体裁〕 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇〇円

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井実応

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拝見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となり、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

● 発 行 ●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

電話〇三(九一八)七三一一番

△発売元 山喜房仏書林△

第五十巻

七月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行  
昭和五十九年六月二十五日印刷 昭和五十九年七月一日発行